

「語の安定化」と二段活用の一段化

佐々木 淳志

1. はじめに

中世～近世期に起こった大きな言語変化に「二段活用の一段化」という現象がある。これは、それまで上下一段活用、上下二段活用と四種の活用の種類を使い分けて表していた動詞の活用の種類が、上下一段活用の二種に統合されることを言う。

佐々木（2010）において、動詞の自他対応と二段活用の一段化について検討した。そこでは、動詞の自他対応に音（形態）を利用する動詞群において、自他判別に一段化を利用した面がうかがえることを指摘した。例えば、自他同型動詞である「のぶる」は、自動詞では上二段活用、他動詞では下二段活用をとる。二段活用を維持した場合、自他動詞どちらも連体形では「のぶる」という形態をとるが、一段化により自動詞「のびる」他動詞「のべる」のように語の同定をより容易にする。そして、この種の表現で一段化が著しく進んでいたのである。このような動きは、「語の同定に一段化を利用した」と言い換えることもできる。

この「語の同定」に関し音節数と二段活用の一段化の関係について考えてみると、一音節語（寝、得、出など）は語幹がなく、活用語尾のみで成り立っている。それは変化しない部分がないということであり、同一語でも活用形によって形態が全く異なる物があるということである。そのような語が一段化することで、語として活用によって変化しない部分ができ（≒語幹化）、語としての同定が容易になる。また、複音節語でも語幹を伸ばすことができ、一音節語と同様の効果が期待できる。このような語幹を増やすことで語の同定を容易にする動きを「語の安定化」と捉えることができる。

これに関わって、坂梨（1970）で近松世話物を資料にして詳しく調査され、一段化に影響を及ぼした要素が明らかにされている。その中に、従来からの指摘のように単音節語において一段化が表れやすいことだけでなく、三音節語は四音節語に比べ二段活用よりも一段活用が表れやすいことが指摘されている。

小林（1981。小林 1981 に基づく小林 2000 でも確認）では、単音節語の一段化傾向が二音節以上の語と比べ強いことが指摘されている。また、山県（1982）で上方絵入狂言本を資料とした研究により少音節語のほうが多音節語に比べ一段化が現れやすいことが指摘されている。即ち、坂梨（1970）では語幹音節数が増え

るごとに一段化しにくくなる傾向を指摘しているのに対し、それ以外の研究では単音節語の一段化が早い傾向は指摘されるが、音節数の多寡という視点での考察は十分にされていないということである。

そこで、本稿では改めて坂梨（1970）の指摘について、「語の安定化」のために二段活用的一段化を利用していないかといった観点で、坂梨の用いた浄瑠璃以外の資料も調査対象としつつ、二段活用的一段化について考察し、「語の安定化」と一段化の関係を見る。

調査は二段活用と、その一段化の混在の様相の観察に適している近世上方の口語的な資料として、浄瑠璃（近松・菅）と、浄瑠璃以外には遊女評判記、歌舞伎台帳、洒落本、噺本を対象として行った。具体的に調査に用いた資料は、引用の際の略称等とともに論文末に示している。

なお、一段化の様相の検討には資料、時代、用法、位相などの相違を総合的に踏まえる必要があるとされる（坂梨 1970）が、本稿はそれらの要素の関与については一まずおき、語の長さと言語の問題を中心に検討してみたい。従って、調査範囲の用例を、大きくは一括して扱うものとする。

2. 音節数と一段化の概要

2.1 動詞の音節数

坂梨（1970）は出現形の音節数に注目し、それと二段活用的一段化について考察する方法である。しかし、二段活用語は、そもそも活用形により音節数が変化するものであるため、この方法をとると、同じ語でも活用形によって違う音節数としてカウントされることになる（注1）。本稿では語としての長さを一律に定める方法により、語別の傾向を探ろうと考える。そこで、ここでは旧終止形の音節数での考察を行う。

なお、「出る」は「いでる／でる」という語の音節数の区別、「いづる／いでる・でる」という二段活用維持／一段化の区別を振り仮名がない限り判断できない。以下に例を示す。

①しうとのいへを出るからは（近松4・卯月紅葉・454・9）

これらは調査範囲に「出」ばかり240例（注2）見られた。語の長さを問題とできないため、本稿の検討においては対象外とする。

まず、本稿での分類を用例とともに以下に示す。

【一音節語（旧終止形が一音節である語の意）…得、出（づ）、寝（ぬ）。】

②ねるすべもしつたれども（近松7・今宮の心中・250・4）

【二音節語…見ゆ、果つなど。】

③手をたゝいたり、果てる事（遊女評判記・19・12）

【三音節語…やつる、乱る、焦がるなど。】

④うかうかこがるる。(近松 6・薩摩歌・709・5)

【四音節語…うろたゆ、くらはす、下さるなど。】

⑤花はきよろきよろうろたへる。(近松 8・長町女腹切・15・4)

・一段化 …本来は二段動詞だが一段化しているもの

⑥ねるよりはやくたかいびき (近松 4・曾ね崎心中・30・6)⑦肌ふれるのは只一人 (菅 1・染模様妹背門松・35・6)

・二段維持…二段型活用を維持しているもの

⑧心みだるるばかりなり。(近松 4・堀川波鼓・535・2)⑨たばこ入などになさるは、(咄本 9・軽口片頬笑・329・6)

・不明…送り仮名の活用語尾が示されず、二段型活用を維持しているかわからないもの

⑩目を光らして尋るげな。(菅 1・北浜名物黒船斬・248・3)

2. 2 動詞の音節数と一段化

以下表 1 は調査範囲全体における、音節数と上下二段活用動詞の一段化を表す。なお、坂梨 (1970) は近松浄瑠璃を調査対象とした指摘であった。そうすると、浄瑠璃以外にも坂梨の見解は当てはまるのかが特に問題となる。そこで、本稿の調査対象資料を、大きく「浄瑠璃」(近松作品と菅作品)と、その他とを区別して示す(表 1 参照)。

表 1 調査範囲全体における、動詞音節数と一段化の様相

作品	音節数	語例	一段化	二段維持	不明	総計	一段化	二段維持	不明
浄瑠璃	1	出(づ)、寝(ぬ)	11	1	2	14	79%	7%	14%
	2	見ゆ、果つ	337	449	162	948	36%	47%	17%
	3	やつる、乱る	116	323	20	459	25%	70%	4%
	4	うろたゆ	13	43	1	57	23%	75%	2%
浄瑠璃 集計			477	816	185	1478	32%	55%	13%
その他	1	出(づ)、寝(ぬ)	26			26	100%	0%	0%
	2	見ゆ、果つ	103	69	9	181	57%	38%	5%
	3	やつる、乱る	35	48	3	86	41%	56%	3%
	4	うろたゆ	4	4		8	50%	50%	0%
その他 集計			168	121	12	301	56%	40%	4%
総計			645	937	197	1779	36%	53%	11%

表 1 から、浄瑠璃では坂梨の指摘どおり、音節数が少ない語でほど、一段化が

進む傾向があることが確認される。それと同時に重要なのが、それ以外の資料でも、まずは概して同様の傾向が読み取れることである。つまり、大きくは、坂梨の指摘は、近世中期の口語的資料において共通して当てはまるものだったと捉えることができるのである。ただし、浄瑠璃に比べ、その他の資料の方がそれぞれの音節数別に比較してもおおむね一段化が進んでいるという違いはある。すなわち、それぞれの資料の成立目的に応じて、一段活用または二段活用のいずれを用いるかということに、度合い差を反映する余地が少なからずあったということである。まずは、そういった一定の留保の上ながら、語が短いほど一段化が促進されている状況があったことを確認しておきたい。

さらに、一音節語(旧終止形が一音節の語)の一段化が、浄瑠璃で79%(11/14)、その他で100%(26/26)と際立って高率である点についてである。このことが、すでに多くの先学によって指摘されてきたことであることは、冒頭にも述べたとおりであるが、単音節語にとって一段化は特別な意味があったということであり、改めて注意しておかねばならない。

ところで、浄瑠璃においても、その他の資料においても、最も一段化が遅れるはずの4音節語の一段化率が、それぞれ23%(13/57)、50%(4/8)と、必ずしも低い値でない。これについては、後節で個別に検討することにする。

坂梨(1970)は「三音節語は四音節語に比べ、二段活用よりも一段活用が表れやすい」としていた。坂梨の方法は活用ごとにカウントするものであったので(注1参照)、旧終止形に直せば多くは「二音節語は三音節語よりも一段活用が表れやすい」という指摘と同義であることになる。そう捉え直すと、表1の結果と大きく隔たっておらず、その内容が、浄瑠璃という資料のみならず、近世中期口語資料に広く共通する傾向として認められるということが確認できたことになる。

以下に一音節語の例を示す。

(一段化) ①地の文 ねよりはやくたかいびき(近松4・曾ね崎心中・30・6)

②会話 でれば其儘切らるる首

(近松10・山崎与次平衛寿の門松・374・6)

(二段維持) ⑬地の文 はんじやうのゑかうをうも其身のくはほうと

(近松4・卯月潤色・590・12)

一音節語で二段活用を維持していると判断できる例は⑬の1例のみである。この例は地の文の例であり、道行から自害にいたる物語の最後の部分である。そのため堅い口調で語られやすい。そのような事情で二段活用を残したと考えられる。また、「得」は「読み得る」「考え得る」のように現代語でも複合語として「可能」を表すことが多く、堅い文章や場面で用いられることが多い。実際の使用例には確認し得なかったが、同時期にも複合語としての二段語の用法が、一方では定着して並列していたために他の一音節語と異なって二段活用を残しやすかったとい

うことがあったかもしれない。

しかし、他の一音節語は全てが一段化を起こし、⑪のように格式を守る意識が高いはずの地の文や、⑫のように変化を起こしにくい已然形（注3）でも一段化を起こしている例も見られる。これは一音節語における「語の安定化」を目指した力が極めて大きいことを物語る。

一方、二音節以上の語では、二段活用を維持しようとする場合が出てくる。例えば、そこには文体の影響が関与する場合があることなどが考えられよう。次の地の文の使用状況などに、それは典型的に表れるものと見る

⑭（二音節語）のんどにあつるかみそりの。（近松4・卯月紅葉・487・11）

⑮（三音節語）ともにみだるるわがころ。（近松8・長町女腹切・42・6）

⑭⑮の二例はともに一段化を起こしていない。これは書き言葉として本来の形式を維持しようとする意識が「語の安定化」を図る力に勝る状況があったことを示す例であると捉えられる。

3 先行研究で指摘される観点の捉え直し

3.1 活用の種類の音節数と一段化

坂梨（1970）や山県（1982）などで活用の種類と二段活用の一段化の関係が調査されている。その中で、上二段活用は下二段活用に比べて変化が早かったという結果が得られている。この点にも、実は語の音節数の問題が深く関わっている。

表2は上二段活用と下二段活用の音節数を比較したものである。

表2 調査範囲全体における、上二段活用と下二段活用の動詞音節数の比較

活用の種類	音節数	一段化	二段維持	不明	総計	一段化	二段維持	不明	総計
上二	2	49	40	33	122	40%	33%	27%	100%
	3	2	5	1	8	25%	63%	13%	100%
下二	1	37	1	2	40	93%	3%	5%	100%
	2	391	478	138	1007	39%	47%	14%	100%
	3	149	366	22	537	28%	68%	4%	100%
	4	17	47	1	65	26%	72%	2%	100%
	音節数不明			240	240	0%	0%	100%	100%
総計		645	937	437	2019	32%	46%	22%	100%

表2を見ると、下二段活用動詞は一～四音節全ての動詞があるのに対し、上二段活用動詞は二、三音節のみであり、中心は二音節語であることがわかる。上二段活用動詞、下二段活用動詞の二、三音節のみの一段化率はほぼ同じ数値を示す。要するに、上二段活用動詞は音節が短く、一段化を指向する語が多いため、下二段活用動詞に比べ一段化する傾向が強く表れるように見えるにすぎない。このこ

とから、活用の種類により一段化傾向の差が表れているというよりは、語の音節数による一段化傾向の差が表れていると考えることができる。

3. 2 助動詞の音節数と一段化

前節では動詞の音節数と一段化の関係を見た。坂梨（1970）では助動詞「(ら)る」「(さ)す」、関連として動詞語尾に「(ら)る」「(さ)す」を持つ語の考察もされている。そこで、ここでは助動詞の一段化傾向、語尾による一段化傾向について検討する。

まず、動詞と助動詞の一段化の遅速を比べた際、動詞の一段化が早く、助動詞の一段化が遅れている事は坂梨（1970）で調査されており、狂言資料や国字本でも同様の結果が得られることがわかっている。

調査対象とする語は二段型の活用を持つ助動詞「す（さす）、しむ、る（らる）」、動詞は調査範囲全体で出現した上下二段動詞全てである。

表3 資料全体の助動詞、動詞の一段化の様相

	活用の種類	一段化	二段維持	不明	総計	一段化	二段維持	不明	総計
動詞	上二	51	45	34	130	39%	35%	26%	100%
	下二	594	892	403	1889	31%	47%	21%	100%
動詞 集計		645	937	437	2019	32%	46%	22%	100%
助動詞	(ら)る	22	482		504	4%	96%	0%	100%
	(さ)す	5	50		55	9%	91%	0%	100%
	しむ	1	1		2	50%	50%	0%	100%
助動詞 集計		28	533		561	5%	95%	0%	100%
総計		673	1470	437	2580	26%	57%	17%	100%

表3を見ると、助動詞全体では5%（28/561）しか一段化をおこしておらず、大半の物は二段の形式を維持したままであることがわかる（注4）。これは上二段、下二段動詞全体の一段化率と比べても大変低い。以下に例を示す。

⑩取返してこいと云るる故。（菅1・北浜名物黒船新・230・12）

「云るる」は、あたかも語彙の意味を上接する動詞部分「云」が担い、文法的意味を助動詞「るる」が活用語尾として担う、動詞一語に準ずるものとして位置づけることができる。このように、助動詞に二段型の活用を維持する傾向が見られることには、これらの語の、動詞と組み合わされて長音節語を構成するという、助動詞としての性質が影響を及ぼしていると考えられる。

4. これまで十分に検討されていない観点から見た音節数と一段化の関係

4. 1 複合動詞の音節数と一段化

ここまでは先行研究において着目されてきた観点に基いて整理、確認した。ここからはそれ以外の要素として、複合動詞の一段化と音節数の関係を見る。

調査範囲での動詞の使用実態として、同じ動詞で「単独で使用されるもの」の他に、「複合動詞として使用されるもの」が見られた(注5)。複合動詞は、「二つ以上の語としての意味を持つ部分が結合して一語となったと認められる合成語のうち、単独でも用いられる二つ以上の単語から構成されている単語。複合動詞では前項と後項が対等・修飾被修飾の関係にあるものが多い。(秋本守英 2001「複合語」『日本語文法大辞典』明治書院)」とされる。以下に例を示す。

- ⑬単独で使用 : すだれをあぐれば(近松4・卯月潤色・574・7)
 ⑭複合動詞・後項: さやをもつて引あぐる(近松4・卯月紅葉・488・3)
 ⑮複合動詞・後項: 口に手を当て引立つ。(菅1・雙紋筥篋籠・84・5)
 ⑯複合動詞・後項: むながいつかんでねぢすゆるは。(近松12・女殺油地獄・202・2)

⑬⑭⑯の例では、後項「あぐる」「立つ」「据ゆ」が意味を失わず、意味を保持しつつも前項要素と一体となって1つの動作を表していることが伺える。つまり、複合動詞として使用される動詞要素(注6)は「二語である」という意識ではなく、二つの動詞要素が合わさった一つの動詞であるという意識が高いと言える。それは、単独で使用される動詞に比べ、音節数が多い動詞として認識されていた可能性が高いと言い換えられる。この点が一段化についてどのように影響していたかが問題となる。

表4は、動詞が単独で用いられる場合と、複合動詞後項の動詞要素として用いられる場合の、それぞれの一段化の状況を示すものである。表中の複合動詞の音節数は、複合動詞後項の動詞要素のみの音節数を表したものである。

表4 調査範囲全体における、二段動詞の自立性と一段化の様相

	音節数	一段化	二段維持	不明	総計	一段化	二段維持	不明	総計
単独で使用	1	35	1	2	38	92%	3%	5%	100%
	2	353	339	91	783	45%	43%	12%	100%
	3	141	318	21	480	29%	66%	4%	100%
	4	15	42	1	58	26%	72%	2%	100%
	音節数不明			142	142	0%	0%	100%	100%
複合動詞	1	2			2	100%	0%	0%	100%
	2	63	177	80	320	20%	55%	25%	100%
	3	10	53	2	65	15%	82%	3%	100%
	4	2	3		5	40%	60%	0%	100%
	音節数不明			98	98	0%	0%	100%	100%
総計		621	933	437	1991	31%	47%	22%	100%

表4を見ると、複合動詞を構成する動詞要素は、大半を占める二音節語、三音節語で単独で使用される語よりも一段化率が低いことがわかる。二音節語では単独で使用される場合の一段化率は45% (353/783) であるが、複合動詞後項では20% (63/320) と半分以下である。同様に、三音節語での単独使用時の一段化率は29% (141/480) であるのに対し、複合動詞後項では15% (10/65) とほぼ半分である。同じ語形の動詞でも、複合動詞として使用される場合二段活用を維持する傾向にあるということである。複合動詞は「ぶちすゆる」「せめかくる」のように、他の動詞要素に接続して使用される。その分、音節の長さを見ると、単独で使用される場合よりも長くなっている。「語の安定化」と一段化の関係では、音節数が短いほど一段化しやすい傾向にあることを先に述べた。助動詞と同様に、複合動詞は音節が増えることで、「語の安定化」がすでに確保されている分二段活用を維持しているとも考えられる。

ところで、表4から複合動詞後項の動詞要素を構成する一音節語の動詞を見ると、用例は少ないが一段化がすすんでいることが読み取れる。ここから、複合動詞後項を構成する動詞要素として使用され、音節が増えたと考えられる場合でも、一音節語であるということは一段化の促進に関して優先される事項だったと言える。

一方で、四音節語では単独使用時の一段化率が26% (15/58) であるのに対し、複合動詞後項での使用時は40% (2/5) と逆の傾向を示す。この一段化した2例は「休らふ」「永らふ」が1例ずつである。この二語は調査資料中に単独であれ複合動詞であれ二段活用の使用例は見当たらず、「休らふ」2例、「永らふ」3例のいずれも全て一段化していた。以下に例を示す。

㉑単独 地の文：いまだ門の内にやすらへるを見付、(咄本6・軽口露がはなし・54・22)

㉒単独 会話文：ながらへる心はない。(菅1・紙子仕立両面鑑・209・5)

㉓単独 会話文：一日でもながらへるが孝行。(近松9・大経師昔暦・546・4)

㉔複合 会話文：生きながらへる心はない。(菅1・紙子仕立両面鑑・164・3)

㉕複合 地の文：立やすらへる折からに。(近松4・堀川波鼓・534・4)

㉑㉕の例に見られるように、従来二段活用を維持しやすいとされている地の文でも一段化を起している。これらはいずれも八行に活用する動詞であり、表記上は八行でも八行転呼音によって実際はワア行で発音することで共通している。したがって、活用語尾に子音を持たないことが、一段化という音韻変化に関与していた可能性がある(詳しくは後述)。いずれにせよ語の長さは一段化の動きと大きくは関係性を示すものの、全てを説明する要素ではないということである。

4. 2 個別の語における音節数と一段化

ここまでは個別の相違はおき、全体を合計してみたものであった。概して音節数が少ないほど一段化を起こしやすい傾向が見られたが、表1から、各資料において4音節語の一段化率が必ずしも低くないことや、表4から4音節語の中に一段化しやすい語があることがわかった。小林(1981)においても、各語の個別事情で一段化する傾向が指摘されている。そこで、ここでは個別の語での様相を見る。表5は調査範囲全体で出現数が10回以上の語のみ抽出し、それぞれ一段化しているもの、二段の形式を残しているものの個数を示したものである。縦軸に「使用されている語の辞書形(旧終止形)」「音節数」をとり、音節毎に一段化の割合(一段化している物/その語の使用全数)の高い物から順に並べた。横軸には「変化の有無」「一段化率(一段化している物の数/出現数)」を示している。なお、一段化する割合に関しては(一段化/(全体-不明)(%))というように一段化率を示した。

表5 調査範囲全体における、使用例の多い語と一段化の様相

音節数	語	一段化	二段維持	不明	総計	一段化
1	出(づ)	14			14	100%
	寝	23		2	25	100%
2	くる	27	2		29	93%
	見す	22	5		27	81%
	投ぐ	7	3		10	70%
	受く	7	5	2	14	58%
	過ぐ	4	3	15	22	57%
	付く	28	27	36	91	51%
	見ゆ	31	31		62	50%
	落つ	10	10	12	32	50%
	締む	6	7		13	46%
	変ゆ	6	7		13	46%
	掛く	40	49	1	90	45%
	据ゆ	5	6		11	45%
	切る	6	8		14	43%
	兼ぬ	4	6	4	14	40%
	逃ぐ	2	3	6	11	40%
	明く	9	15	9	33	38%
止む	6	10		16	38%	
立つ	11	25	40	76	31%	

	降る	4	11		15	27%
	当つ	3	8		11	27%
	上ぐ	10	27	13	50	27%
	入る	7	20	7	34	26%
	捨つ	4	14	14	32	22%
	果つ	2	9	1	12	18%
	開く	3	15		18	17%
	寄す	3	16	1	20	16%
	さす	4	23		27	15%
	越ゆ		13		13	0%
	消ゆ		12		12	0%
3	教ゆ	7	3		10	70%
	聞こゆ	4	6		10	40%
	零る	2	9		11	18%
	合す	3	15		18	17%
	忘る	3	15		18	17%
	留む	2	15	1	18	12%
	なさる	5	71		76	7%
	焦がる	1	15		16	6%
	尋ぬ	1	17	16	34	6%
	逃る		11		11	0%
	乱る		13		13	0%
	別る		16		16	0%
	流る		10		10	0%
総計		336	606	180	1122	36%

表5を見ると、概して音節数の少ない語の一段化は速く、音節数が多くなるほど一段化しにくいことがわかる。これは、延べ語数で見たときと同じ傾向である。

しかし、語による一段化傾向の違いも見られる。二音節語では、90%超から0%まで幅広い。「くる」、「見す」の2語は大変一段化が進んでいるが「消ゆ」「越ゆ」など、三音節語に比べても一段化が進行していない語も見られる。この「消ゆ」「越ゆ」は死に至る場面での使用例が多く、そのような文脈に依存しているため二段活用を維持している可能性が考えられる。以下に例を示す。

②6きゆるまぢかきわがいのち。(近松・4・卯月潤色・580・12)

②7しでの山路をこゆるかと。(近松5・心中万年草・727・4)

また、三音節語は概して二音節語よりも一段化しにくいことは前述したが、「教ゆ」「聞こゆ」のように一段化しやすい語があることも読み取れる。この2語は、

3音節語の中でも頭抜けて一段化率が高いのであるが、いずれもヤ行に活用する語である事実は注意される。

4音節語には10回以上出現する語はなかったため、表5には示し得ないが、表1から、4音節語で一段化を起こしている語は17例であることがわかる。以下に例を示す。

㉘新法にこしらへるといふものにて、(咄本8・軽口浮瓢単・165・19)

㉙いまだ門の内にやすらへるを見付、(咄本6・軽口露がはなし・54・22)

17例中、「拵ゆ」「うろたゆ」「考ゆ」など、㉘のように活用語尾がヤ行音である動詞が6例、「休らふ」「永らふ」など、㉙のように活用語尾がハ行音である動詞が6例見られた。つまり、音節数が多く、二段活用維持の傾向にある4音節語の中で、活用語尾がヤ行、ハ行の語は71% (12/17) と高い一段化傾向を示しているということである。活用語尾がハ行である動詞は、前節で検討した複合動詞後項というより安定した状況においても一段化する傾向があった。また、先に指摘した、3音節語で高い一段化率を示す「教ゆ」「聞こゆ」も活用語尾がヤ行音の語である。つまり、いずれもヤ行、あるいはハ行(発音はワア行)という、子音としては自立性が希薄な活用語尾を持った動詞に、顕著に一段化の進行が認められるということである。これらにおいては、子音がない分、音変化が容易であったことが推測され、それが一段化を促したと考えるべきなのであろう。

しかし、前述したように、活用語尾がヤ行音の動詞でも文脈に依存し二段活用を維持していると考えられる語もある。これらは「語の音節数(長さ)」が、一段化の全てを説明するものではなく、他の要素が関わることを物語る。

5. おわりに

本稿では、語の安定化という観点から一段化の様相を検討した。その結果、以下の結果が得られた。

【音節数と一段化の概要】

- ・概して音節数の短い語から一段化が進んでいる。これまで、近松浄瑠璃を中心に指摘されてきたことであったが、この傾向は近世中期口語資料に広くうかがえそうである。

先行研究で指摘される観点の捉え直し

【活用の種類の音節数と一段化】

- ・上二段活用動詞の一段化が進み、下二段活用動詞は二段活用を維持する傾向が強い。ただし、その差は活用の種類に因るものではなく、音節数による影響が強く出ているものだと考えられる。

【助動詞の音節数と一段化】

- ・助動詞と動詞の一段化傾向を比較すると、助動詞の方が二段型の活用を維持している。これは、動詞と組み合わせられて長音節語を構成するという助動詞の性質が影響を及ぼしていると考えられる。

これまで十分に検討されていない観点から見た音節数と一段化

【複合動詞の音節数と一段化】

- ・複合動詞後項の動詞要素では二段活用を維持しやすい。構成要素となる動詞は、他の要素と一体となることによって、音節数の多い語の一部をなすという意識が生じることがそこには関わっていたと考えられる。

【個別の語における音節数と一段化】

- ・単音節語以外では、活用語尾がいわゆる半母音の語において、音節の長さによらず一段化しやすい。また、変化の速い短音節語や半母音を活用語尾に取る語でも堅い口調で語られやすい部分では二段活用を残したと考えられる語があった。これらは「語の音節数（長さ）」が、一段化の全てを説明するものではなく、他の要素が関わることを物語る。

本稿で見た観点は、「語の安定化」への指向というキーワードでまとめることができる。「語の安定化」とは、語として活用によって変化しない部分（語幹）を増やし、語の同定をより容易にする動きだと捉える。坂梨（1970）における「音節数が増えるほど二段活用形式を維持しやすい」という指摘は、この「語の安定化」の実際の傾向をとらえていたと考えられる。

音節に関して、単音節語の一段化が早いことは、「語の安定化」を進める力が二段活用を残す力よりも強かったからだと考えられる。従来二段活用を維持しやすいと言われてきた已然形や、格式を守る意識が高いはずの地の文でも一段化を起こしている例も見られることを本文中で指摘した。活用語尾のみで成り立っている単音節語は、一段化することで語として活用によって変化しない部分を新しく作ることができ（≒語幹化）、語としての同定という点においては劇的な効果を生む。そのため、単音節語の「語の安定」を指向する傾向は二音節以上の語に比べ格段の強さを示したのだと考えられる（注7）。一方、二音節以上の語では、文体の影響を受け二段活用を維持しようとする場合が出てくる。音節の短い語の一段化が進み、音節の長い語は二段を維持するという傾向があるのは、その「語の安定化」の指向性の強さが一段化を促す要素として関与している証左と考えられる。それは単独で使用される場合よりも音節が長くなっている複合動詞を構成する動詞要素が単独使用時よりも二段活用を維持しやすい傾向にあることからわかる。

定説となっている活用の種類や動詞・助動詞による一段化傾向の違いも音節に

よる一段化の様相を別角度から捉え直したものだと思えることができるため、この「語の安定化」を指向した動きに位置づけられる。

以上から、語の音節数が増え「語の安定化」を図る必要性が低い場合ほど、他の事情の影響を受けやすくなり、それが語によって一段化率が高かったり低かったりという状況を生み出していることがわかる。しかし、一方で、「語の安定化」だけでは説明のできない用例が見られることも述べた。中でも、活用語尾の子音に半母音を取る語に一段化が顕著であったという傾向など、「言いやささ」とでもいべき要素が関連している事実があることも指摘した。これは「語の安定化」という要素も、一段化を説明する諸条件の一部をなすに過ぎないものであって、他にもさまざまな事柄が関与する中で、一段化が実現していたことを示唆するものである。本稿が大きくは不問に付した、資料、時代、用法、位相といった観点こそがそれを説明する部分もあるはずである。あるいは「二段活用がふさわしい／一段活用がしっくりくる」といった、用法別に感じたであろう人々の表現に対する意識といったものも、看過できない要素ではないかと考えている。いずれも稿を改めつつ、論じる予定である。

注

1 坂梨(1970)での音節数のカウントは、次の方法をとるものである。

(1) 同一語でも活用形ごとに異なった音節数で数える。

忘る → 終止形：三音節 連体形：四音節 已然形：四音節

(2) 複合動詞や補助動詞、助動詞など、接続したまま音節数を数える。

さやをもって引あぐる(近松4・卯月紅葉・488・3) : 五音節

なんと聞てくれる気か。(菅1・紙子仕立両面鑑・185・11) : 六音節

取返してこいと云る故。(菅1・北浜名物黒船斬・230・12) : 四音節

このように、一つ一つの使用状況に即す方法((1)参照)、あるいは辞的に用いられる要素を独立させない方法((2)参照)も十分に意味のあることである。しかし、一度それぞれの構成要素本来の単位にて考えることによって、各語の性質による一段化傾向を単純化して考えてみる方法もあり得るであろう。そこで、本稿では基本的に一語をなしうる最小単位である(旧)終止形での音節数を基準として検討する。また、調査資料中に見られた複合動詞、補助動詞の音節数に関しては全て単純語に戻して検討する。(旧)終止形での検討を行うことで、活用形により複数の音節にカウントされることが回避され、また、用法の影響関係を除けた場合の一段化の様子を純粹に見ることができることによって、当該の語としての長さとの一段化の関係性が可視化できると考える。

2 調査範囲中に「出」は262例見られた。そのうち、振り仮名により「いづ」であること、すなわち二段活用を維持していることが判断できるものが8例、

「でる」であること、すなわち一段化していることが判断できるものが14例見られた。残り240例は振り仮名がなく音節数、一段化／二段維持の判別ができないものだった。

- 3 「地の文が一段化を起こしにくい」「已然形は一段化を起こしにくい」という指摘は、坂梨（1970）において指摘されている。また、この傾向は小林（1981）山県（1982）によって版本狂言記や上方絵入狂言本でも同様に見られることが明らかにされている。
- 4 助動詞全体では概して二段活用を維持する傾向が見られるが、28例一段化しているものが見られる。これらに関しては、意味、用法による一段化への影響があったとの見通しを得ているが、稿を改めたい。
- 5 調査範囲での動詞の使用実態としては、本稿で取り上げた「単独で使用されるもの」「複合動詞として使用されるもの」の他に、「補助動詞として使用されるもの」が見られた。以下に例を示す。
 - ・なんと聞てくれる気か。（菅1・紙子仕立両面鑑・185・11）
 - ・まま母にかけてくれるなど。（近松4・心中二枚絵草紙・195・6）
 これら補助動詞として使用される動詞は28例あり、24例（86%）が一段化しているというように、非常に一段化を起こしやすい傾向を示す。これらは文法形式として辞的に使用されるものも多く、語の長さとはまた違った観点からの分析を要する。ここではこれら補助動詞が一段化傾向を顕著に示す点だけを確認し、この点は別稿に期するとする。
- 6 複合動詞の構成要素となる動詞を以下「動詞要素」とする。
- 7 既に小林（1991）に「『意味の留保』がより難しい語幹単音節語から二段活用が一段化した」という指摘がある。本稿の検討結果もそれを支持するものであったということができる。

【調査資料】

〈近松門左衛門〉一引用では（近松 全集巻数・作品名・ページ・行）と表す。

曾根崎心中・薩摩歌・心中二枚絵草子・卯月紅葉・堀川波鼓・五十年忌歌念仏・卯月潤色・心中重井筒・丹波与作待夜の小屋節・淀鯉出世瀧徳・心中刃は氷の朔日・心中万年草・冥途の飛脚・今宮の心中・夕霧阿波鳴渡・長町女腹切・大経師昔暦・生玉心中・鐘の権三重帷子・山崎与次兵衛寿門松・博多小女郎波枕・心中天の網島・女殺油地獄・心中宵庚申（『近松全集』第4巻～第12巻 岩波書店 1986年～1990年）

〈西水庵無底居士〉一引用では（遊女評判記・ページ・行）と表す。

色道諸分 難波鉦・遊女評判記（『色道諸分 難波鉦』岩波書店 1991年）

〈中田椿同〉一引用では（台帳・ページ・行）と表す。

心中鬼門角（『歌舞伎台帳集成』 第1巻 勉誠社 1983年）

〈菅専助〉一引用では（菅 全集巻数・作品名・ページ・行）と表す。

紙子仕立両面鑑・北浜名物黒船噺・雙紋筐巢籠・染模様妹背門松（『菅専助全集』 第1巻 勉誠社 1990年）

〈洒落本〉一引用では（洒落本 全集巻数・作品名・ページ・行）と表す。

郭中奇譚・聖遊郭・短華蘂葉（『洒落本大成』 第2巻 第4巻 第13巻 中央公論社 1978年～1981年）

〈噺本〉一引用では（噺本 全集巻数・作品名・ページ・行）と表す。

軽口露がはなし・露五郎兵衛新はなし・軽口御前男・軽口あられ酒・軽口星鉄砲・軽口はなしとり・軽口独機嫌・軽口へそ順礼・軽口浮瓢箆・軽口東方朔・軽口片頬笑（『噺本大系』 第6巻～第8巻 東京堂出版 1976年）

参考文献一覧

- 小林賢次（1981）「版本狂言記における二段活用の一段化について」『新潟大学教育学部高田分校紀要』25
- 小林賢次（2000）「狂言台本を主資料とする中世語彙語法の研究」（勉誠出版）
- 小林賢章（1991）「二段活用の一段化時期」『語文』56
- 近藤政美（1977）「国字本「こんてむつすむん地」における動詞の上下二段活用の一段化について」『愛知県立大学説林』26
- 坂梨隆三（1970）「近松世話物における二段活用と一段活用」『国語と国文学』47
- 佐々木淳志（2010）「自動詞・他動詞と二段活用の一段化」『愛知教育大学大学院国語研究』18
- 山県 浩（1982）「活用型の変化から見た上方絵入狂言本 - 二段活用の一段化の場合 -」『語文研究』52-53

（ささき・あつし 本学大学院平成21年修了）